説教20220415マタイ27：32-56「羊飼いの死」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

昨日は洗足の木曜日で定例祈祷会も行われましたが、取り上げた聖書箇所はこの詩編23編でした。主は私の羊飼い、私は羊。羊の私は主の御手のうちに安らい、主は私を命がけで守って下さり、そんな主を信じて私は主に何処までもついて行くのです。それと同時に、主から油注がれ召命を与えられた私は、「私の小羊を飼いなさい」と主イエスが命じられた通り、羊飼いとして、主の為に務めを果たしていく者ともされているのです。羊でもあり羊飼いでもあるこの私は、いつも命を賭けて、オオカミなどの苦しめる者たちから、その群れを守っていくのです。そのように片時も油断できない状況の中にあって、羊飼いと羊の関係は深められ、そこには一匹のオオカミも付け入るスキを与えないような愛と慈しみの場が形作られていくことでしょう。それが主イエスが建てられたこの教会と言うところです。

昨日この様に話していましたら、或る兄弟が、この様に聖書で語られる、羊飼いと羊との深い信頼関係や愛情関係を私はとてもイメージすることが出来ません、とおっしゃるのです。それはどういうことかと言いますと、彼の御家族は戦後、物資が無い頃に羊を飼っていまして、羊毛を集めて、それを仕立て屋さんのようなところに持っていって自家用の様々な衣類を補っておられたそうです。それである時、子供であった自分が友達と外へ遊びに出かけている間に、一匹の羊が不注意で家のベランダにあったに首をひっかけてしまって、死んでしまったのだそうです。ですから、彼の実体験に基づく記憶によりますと、羊と言うのは家の人たちから、そんなには、聖書でいうところの命がけで守るといったほどには大事にされていなかった、と言う印象なのだそうです。

このお話は、大変興味深いことを私たちに物語っているようです。私たちの農耕中心の文化の中では、イスラエルのような牧畜中心の国で、実際に羊が羊飼いからどのように守られているのかという事をイメージすることが難しいです。私たちは実際には見ていない羊と羊飼いの姿を、聖書を読んで、一生けん命想像しながら、思い描くのです。そうするといつしか、羊飼いという者は、羊を命がけで守るのだという事が信じられて、そのことは一つの事実となるのです。

ところが、自分が実体験で、先ほどのような羊と羊飼いとの関係の有様の一端を見てしまっている場合、その体験したということが、かえって素直に信じていくことの妨げになってしまわないとも限らないという事です。

それで、私が、「お家では羊を何匹飼っておられたのですか」と問いますと「２匹です」とお答えになりましたので、うむ、これは聖書に出て来る羊の数とは比べものにならないので、聖書を読む時は、この昔の実体験のことは忘れて下さい、という落ちになりました。

聖書を読みますと、私たちが実体験したことが無い出来事が次から次に出て参ります。ラザロが復活して墓から出てきた、という事、このようなことが起こったことを経験した方があおりになるかもしれませんが、多くの方は、死んだ人が復活したことを実体験したことはおありにならないでしょう。でも、そのことは私たちが信じるという事の妨げにはならないですし、かえって実体験していないがゆえに、それを成されたイエス様への私たちの信仰は見えないゆえに深くされていくのです。

さて、私たちが今過ごしている、受難週と言うのは、主イエスが十字架に付けられ死にそれから復活した出来事を思い起こす、とても貴重な日々であります。今日読まれましたマタイによる福音書の聖書箇所は先日の主日のときと同じですが、この個所であまりに多くのことが立て続けに起こって、毎日でも読んで黙想を膨らましていける箇所です。

主イエスが十字架に掛けられていた時間と言うのは、午前９時～午後３時の６時間ですが、その間に、太陽の光は失われ、イエスは息を引き取ります。それから神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩がけたというのです。

実は私たち人間はこの様に鬼気迫る成り行きにとても弱くて、影響を受けて、恐れのうちに判断力を失ってしまって、とんでもないデマを信じたりするようになってしまいます。それまで、くじを引いてイエス様の服を分け合っていた者、イエス様の頭の上に、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた者、頭を振りながらイエスをののしって通りかかった者、「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」と軽く言い放った者たちも皆、この鬼気迫る出来事に恐れをなして、パニックに陥っていたことでしょう。そのような極限状態の中で、人間は自分の力が役に立たず、何かにすがるようにされ、何かを信じようとするのでしょう。

そうゆう状況の中で、「墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。」のであります。

これらの出来事は、今の私たちが実体験した事ではありません。が、長い年月、聖書によって語り伝えられてきた出来事であります。冒頭に申し上げました様に、私たちにとって実体験した事が全部、喜ばしくて有益なのではありません。中には、忘れ去ってしまった方が良いことも数多くあることでしょう。他方、自分が実体験していないことの中には計り知れない深みがあり、私たちはそのことを想うことによって、その内容を深めていくことが出来るという事も示されました。

イエス様が十字架にかかっていた６時間と言うのは、画期的な時間でありました。被造世界全体が揺れ動かされ、それまでの人々の信仰の中心であった神殿の垂れ幕が避け、イエス様は息を引き取られました。それまで人々は、イエス様のことを一人の人間として、自分とはかかわりのない一人の人間としてみて、イエス様をあざ笑い、ののしるだけの余裕があったのです。自分には無関係の一人の男の死が、自分に何ほどのことであろうというわけです。ところが、イエス様の死と同時に、恐るべきことが起こったのです。それに遭遇した人々が発した言葉と言うのが、「本当に、この人は神の子だった」という言葉です。自分たちが今まで一人の人間として見ていたこの人こそが神の子であったという事を知って驚きの声を上げたのです。人々は、その時起こった、太陽の光が失われ、地震が起こったことなどに動揺しこそすれ、その人々が心を向けたのは他ならぬ、神であり人であるイエス様その方だったのです。

今迄イエス様をあざ笑っていた者たちは、この後イエス様を再びあざ笑うことが出来たでしょうか。自分たちが行ってきた罪多き行いは、この十字架での出来事を実体験することによって打ち砕かれ、彼らは向きを変えざるを得なくなったことでしょう。

さて今の世でも、この被造世界は大いに揺れ動かされ、そして伝染病が蔓延し、戦争のニュースが日々流れるという、何かイエス様が十字架にかかっていた６時間での出来事にも較べられる状況がの前に繰り広げられています。私たちは日々流されるニュースにショックを受け、動揺しています。私たちは今、何を信じていいか分からない戸惑いの時代を歩まされています。伝染病も大変、戦争も無慈悲で赦せない、地震も起こって、もはや人間の手ではコントロールできません、神よお救い下さい、と多くの方々が声を上げているように思われます。しかし、いくら声を上げても、何を信じてよいのか、多くの人にはその焦点が定まらないようであります。

しかし今、ここに集められている私たちにはその焦点がここに掲げられています。この主イエスの十字架であります。イエス様は十字架上で死なれた時、集められた羊たちをお見捨てになられたでしょうか。彼は決して羊たちをお見捨てにはなりませんでした。ですから彼は復活して墓から出てこられたのです。イエス様が十字架上にいる時に起こされた天変地異、神殿の垂れ幕が裂かれたこと、などなどは、全て、人々が罪多き自らの行いを悔い改め、罪を赦されて、イエス様その方のほうに向きなおらせるためでした。

私たちはイエス様が十字架にかかられていたときの出来事を実体験したわけではありません。しかし、その出来事を経て、今の私たちには、この様に主イエスの十字架と教会とが与えられ、私たちが確かに目指すべき焦点と、そこにむけて歩んで行くための実体験となるこの教会と言う場を与えられています。

主イエスを信じて、主イエスのことを知る道は、小羊たちがひたすら羊飼いであるイエス様を信じて追い求めていく道であります。何を信じていいのか分からない今こそ、私たちはイエス様その人こそ救いの主であることを、はっきりと人々に告げ知らせていかなくてはならないでしょう。

受難の日々に遭って、私たちは小羊でもあり、又、羊飼いでもあります。いつもオオカミに狙われているような命がけの境遇にあって、常に守られ、襲われて命を失わないためには、私たちは互いの為に働いて、祈り続けることが大切です。そして私たちの大牧者は十字架から復活された主イエスであります。全ての災いから、いつも何処に在っても私たちを救い出して下さる主イエス様、そのイエス様を見つめつつ、私たちは、ご復活の主の日を待ち望んで参りましょう。